

日本周辺高度回遊性魚類資源調査委託事業

藤田 弘一・岡本 楠清・松尾 剛平・柴原 浅行・谷水 宗美・柴原 昇・柴原 伸弘

目 的

平成12年（2000年）9月「中部及び西部太平洋における高度回遊性魚類の保存管理に関する条約」（MHLC条約）の採択に伴い、我が国200海里水域内の漁獲を含め、本条約水域内のかつお・まぐろ類の漁獲が国際管理の対象となる。我が国はこの条約について沿岸国の意志が強く反映され、漁業国の立場が尊重されていないため、条約に署名していないが、科学的な評価に基づく漁獲可能量の設定等の国際的管理措置の必要性については明確に認めている。このため、条約に基づく科学的検討に的確に対応すべく、我が国周辺水域におけるカツオ・マグロ類の資源調査を拡充し、詳細な漁獲モニター、大規模標識放流調査等の調査を実施し、我が国が漁獲している当該資源について、科学的知見を全国的な協力体制のもとで収集することになった。このような状況の中、本県周辺水域においては、高度回遊性魚類が来遊し、多種多様な漁法で漁獲されていることから、全国調査の中でこれら資源の本県における漁獲実態調査を実施する。なお、従来漁況海況予報関連事業で実施されていた、カツオ・ビンナガに関する漁況予報に関しては、本事業において「来遊資源量予測」という形で実施した。

方 法

沿岸小型船による一本釣り（竿釣り、曳縄漁業）及び延縄漁業によるカツオ・マグロ類（クロマグロ、キハダ、メバチ、ビンナガ）の県内主要水揚げ港である和具、浜島、田曾浦、長島、尾鷲の5港と大中まき網漁業がある奈屋浦港の計6港において、漁業種別水揚げ量調査を実施した。また、和具と浜島の2港においては漁獲物の魚体測定を実施した。熊野灘沿岸の大型定置網ではマグロ類がある程度まとまって入網することから、上記6港の集計とは別に県内大型定置網16ヶ統のカツオ・マグロ類水揚げ量調査を実施した。近海・遠洋における中型・大型竿釣り船の動向については、三重県漁労通信連合会及び近海漁労通信連合会所属船から「無線漁況連絡聴取簿」（Q R Y情報）の提供を受け、カツオ・ビンナガ漁船の月別・旬別稼働隻数及び漁獲量を緯度・経度毎

に整理し、漁場の推移や漁況と海況の関連等について検討を行った。

結果および考察

詳細については、関連報文に記載しているため以下に概要を記す。

1. 沿岸漁況

県内主要6港の魚種別・銘柄別・漁法別漁獲状況を以下に示す。

平成15年（2003年）のマグロ類の水揚げ量は354トンで前年の423トンに比べて約70トン減少した。前年に比べてクロマグロ（本年19.9トン前年8.6トン）とキハダ（本年195.7トン前年146.8トン）は増加したが、メバチ（本年14.4トン前年24.4トン）とビンナガ（本年123.7トン前年243.3トン）の減少分が上回った。クロマグロの水揚げ量は、過去最低であった前年の8.6トンから、19.9トンへと増加した。1～6月期の水揚げ量は1.6トンと2002年同期3.4トン（47%）、2001年同期4.4トン（36%）を大きく下回った。7～12月期は18.3トンと2002年同期5.1トン（359%）、2001年同期17.3トン（106%）を上回った。従来漁獲の主体を占めていた浜島港と和具港共前年に引き続いて少なく（沿岸小型曳縄船と沿岸カツオ一本釣り船による水揚げが主体）、紀伊長島（曳縄・中型まき網）や奈屋浦（中型まき網）で多かった。漁業種別にもう少し詳しく見ると沿岸竿釣り漁は前年109kgから3トン、曳き縄漁は同485kgから5.5トンとなっている。これは前年（2002年）の漁獲量が非常に少なかったためであり、前々年（2001年）のレベルに戻った。一方、まき網漁は前年707kgから5.9トンと大幅に増加しており、先にも述べた水揚げ港別の結果を反映したものとなっている。また、県内大型定置網漁（16ヶ統）でのクロマグロ水揚げは1・7月に1トン前後の水揚げがあった他は全般に低調で、年間のクロマグロ水揚げ量も4.6トンと前年水揚げ量15.4トン、平年（過去11年）水揚げ量10.2トンに比べ前年比30%、平年比45%と低調であった。このように大型定置網の水揚げ量からも今漁期の熊野灘海域へのクロマグロ来遊

水準は低かったと推測される。

一方、養殖用種苗として釣獲されるクロマグロ幼魚（これもヨコワと称される：尾叉長20～30cm、体重165～600g）についても調査した。クロマグロ幼魚の採捕は浜島港では7月下旬から始まり、本年は出漁隻数115隻で5,292尾（1,400円／尾）が集荷された。奈屋浦港では、6,300尾であった。なお、宿田曾港でも若干の買入れがあったようであるが尾数は確認できていない。1998年以降の年間採捕尾数は約5,000尾から40,000尾程度の範囲で推移している（図1）。

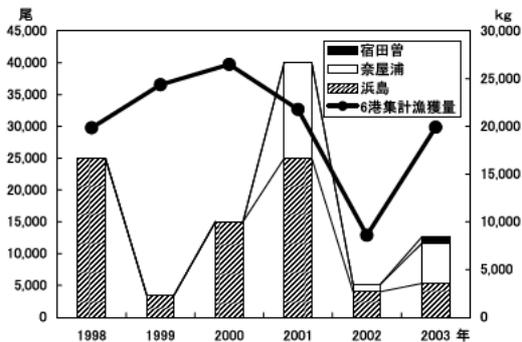


図1 三重県沿岸におけるクロマグロ幼魚採捕尾数と漁獲量
クロマグロ漁獲量は未成年と成魚を含む

カツオについては平成15年（2003年）の小型沿岸船（曳縄・竿釣り）水揚げ量は934.2トンと好漁年となった平成12年（2000年）の同時期水揚げ量約1,500トンには及ばないものの好調に推移した。5月上旬から中旬には熊野灘海域に好漁場が形成され、沿岸小型船の5月の水揚げ量は644.6トンと平成12年（2000年）の548.8トンを約100トン上回り、過去最高を記録している。沿岸小型船の主要港である浜島、和具港では5月上旬から中旬に連日10トン以上の水揚げが続いた。漁場は大王崎沖を中心に沿岸1～2マイルから沖合の熊野灘海域全域が漁場となり、地元船を主体に和歌山県、高知県、徳島県、静岡県などの県外船とともに活況を呈した。魚体は5月上旬までは特大・大混じりの中・中小主体であったが、5月中旬以降は大型魚の出現がなくなり、中・中小・小の小型魚主体の水揚げとなった。5月は近海竿釣船も沿岸の漁場に参入し、紀伊長島港所属船を主体に高知、和歌山、宮崎県船が操業し、紀伊長島港の中型船による5月の水揚げ量は延べ52隻で383トンであった。中型船の県内港（和具、長島、尾鷲）における5月の水揚げ量は延べ73隻で452.6トンの水揚げ量であった。これ

ら5月のカツオ好漁は人工衛星画像等から、黒潮流路の変動に伴う伊豆諸島北部からの黒潮反流によって大王崎沖から熊野灘沿岸への暖水流入による潮境が形成されたためと考えられた。

2. 近海中型竿釣船

QRY情報による三重県近海中型竿釣船の平成15年（2003年）のカツオ漁獲量は15,330トン、CPUE6.8トンと前年の漁獲量8,700トン、CPUE4.6トンから大幅な増加であった。漁場は、1～4月小笠原諸島周辺海域、4～5月熊野灘～伊豆諸島周辺海域、5～11月黒潮前線域～三陸が主漁場となった。小笠原諸島周辺海域で約3,730トン、CPUE7.6トン、伊豆諸島周辺海域で約2,860トン、CPUE4.1トン、三陸周辺海域で約8,740トン、CPUE8.1トンの漁獲量であった。また、平成15年（2003年）漁期のピンナガについては漁獲量は1,929トン、1日1隻当たり漁獲量（CPUE）は10月に10.2トン、漁期中の平均CPUEは7.0トン／隻・日と前年に続いて好漁であった。ただし、前年は夏季（6月）がピークであったのに対して今期は秋季（10月）にピークが見られたのが特徴であった。

3. 大型竿釣船

三重県大型竿釣船の平成15年（2003年）漁期カツオ漁獲量は24,340トンで前年の23,062トンよりは多かったものの、平成4年（1992年）以降の平均漁獲量29,916トンを下回った。近海漁場は5月に房総半島東沖で始まり、9月には三陸沖から北海道南部沖にかけて好漁場が形成され、11月上旬にはほぼ終漁した。一方、ピンナガの漁獲量は14,515トンと好漁であった前年の23,822トンをかなり下回った。平成4年（1992年）以降の平均漁獲量12,245トンを上回った。今期は6～8月の夏季漁だけでなく近年少なかった10月に秋季漁のピークが見られたことが特徴であった。

関連報文

独立行政法人水産総合研究センター：平成15年度日本周辺高度回遊性魚類資源調査委託事業報告書

三重県科学技術振興センター水産研究部：平成15年度三重県竿釣りカツオ・ピンナガ漁況総括